

<和漢>의 경계영역에 초점을 맞추다

『신찬만엽집』의 와카와 한시의 상보관계를 중심으로

니시노이리 아쓰오*

[국문 초록]

본 논문은, 일본고대문화가 중국문화를 받아들일 때 생성되는 경계적인 영역에 초점을 두었다. 최근 일본의 연구동향을 근거로, 종래의 연구에 이용되어 온 「화한(和漢)」과 「국풍(國風)문화」라고 하는 용어의 문제점을 검증하였고, 9세기 후반에 성립된 『신찬만엽집(新撰万葉集)』이라고 하는 텍스트의 재검토를 시도하였다.

『신찬만엽집』에서는, 와카(和歌)와 한시가 서로 보완적으로 관계하여 하나의 허구세계를 창출하는 방법을 확인할 수 있었다. 개개의 장르로 묶을 수 없는 새로운 창작스타일이며, 「화(和)」도 「한(漢)」도 아닌 「화(和) 속의 한(漢)」이라고 하는 특수한 영역으로 자리매김할 수 있는 특징이다.

주제어 : 한자문화권, 화한(和漢), 경계영역, 와카와 한시, 『신찬만엽집』

* 桐朋女子高等学校音楽科教諭, atsuo73@hotmail.com

〈和漢〉の境界領域に目を向ける*

『新撰万葉集』の和歌と漢詩の相補関係から

西野入 篤男

- 차례 -

- 1.はじめに
2. 外来文化の吸収・受肉化のとらえ直し
3. 〈和漢〉の基本構造
4. 『新撰万葉集』の和歌と漢詩について
5. 本場にはない「漢詩」の役割
6. おわりに

〔日本語要旨〕

本論は、日本の古代文化が中国文化を取り込む際に生成される境界的な領域に目を向ける。近年の日本における研究動向を踏まえつつ、従来の研究で用いられてきた「和漢」や「国風文化」というタームの問題点を検証し、九世紀後半に成立した『新撰万葉集』というテキストのとらえ直しを試みる。『新撰万葉集』では、和歌と漢詩が相補的に関わりながら一つの虚構世界を創り出すという方法が確認できる。個々のジャンルにとらわれない新たな創作スタイル

であり、それは「和」でも「漢」でもない「和の中の漢」という特殊な領域に位置づけられる特徴である。

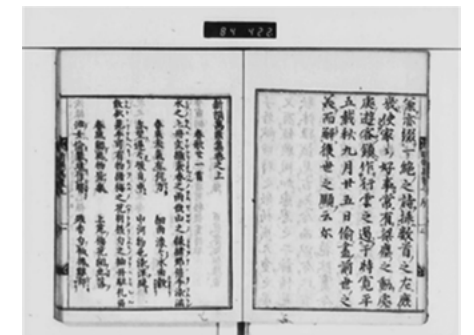
キーワード: 漢字文化圏、和漢、境界領域、和歌と漢詩、『新撰万葉集』

1. はじめに

自らを世界の中心とは見なさなかった東アジアの辺境地域は、中国の圧倒的な影響力のもとで自文化を創出・発展させた。中国文化を貪欲に取り込みながら(インプット)、それを自文化に適応・順化させて新たな形に作りかえいく営み(アウトプット・加工)は、いずれの地域でも同じように行われていることだろう。本論は、中国文化を日本文化に取り込む際に生じる境界領域に着目し、〈中国／日本〉の二項対立的な観点ではとらえきれない文化の動態について考察を試みる。

まず注目するのは、日本古代の文化を論じる際に用いられる〈和漢〉という概念である。従来は、「和＝日本」と「漢＝中国」というような単純な

構図でとらえられてきたが、その実態は「漢製の漢」・「和製の漢」・「和製の和」としてとらえるべきものである¹⁾。ポイントは「和製の漢」というような「和」でもなく、また「漢」でもないという「境界領域(グレーゾーン)」を設定



寛文七年版の版本：国文学研究資料館データベースより

1) 島尾新『「和漢」のさかいをまぎらかす』茶の湯の理念と日本文化』淡交社、2013年。

する点であり、そうした構造は個別の文化を越えて学際的に議論をする際に共有可能な枠組となるはずである。

次に、そのような構造を考察するに当たって興味深いテキストとして、九世紀後半に成立した『新撰万葉集』という和歌撰集を取り上げる。画像には国文学研究資料館で閲覧可能な寛平七年版の版本を挙げた。和歌が真名体で表記され、その左に漢詩が併記されている。この漢詩は、和歌を翻訳・翻案した七言絶句であり、同時代的には他に類を見ないユニークな試みが確認できるテキストである。

『新撰万葉集』の研究は、諸本・成立・編者とといった事柄をめぐる資料的・実証的な研究から²⁾、和歌・漢詩それぞれの典拠・出典を特定していく注釈研究³⁾、及び個別の詩歌の典拠・出典から解釈を示すといったテキスト的研究が行われてきた。後に詳しく見ることになるが、ここでは、「和」と「漢」が二項対立的にとらえられ、その主眼は原文である和歌を漢詩に移し替える際の〈忠実さ〉の測定である。

そうした先行研究に対し、このテキストが東アジアの〈文字とジェンダー〉の問題や、〈普遍語・現地語・国語〉の枠組に接続して大きな論を立てられる可能性があること⁴⁾、また『新撰万葉集』の和歌と漢詩の関係性を論じる研究は、言語的アプローチのみに止まらずに、文化的アプローチにも取り組むべきであり、その際は「翻訳学」の〈翻案〉理論の参照し、変化を伴う反復が生み出す創造性を積極的に評価すべきことを、本論に

先立つ論考で指摘してきた⁵⁾。具体的な詩歌の内容分析や、言語学的観点から和歌と漢詩の等価性を論じて翻訳・翻案の善し悪しを論じることに止まらず、このテキストの雑多な書記(エクリチュール)や翻訳・翻案という行為そのものに目を向けることで、個別のテキスト分析を越えた、東アジアで共有できる問題の設定が可能になることを指摘している。そうした問題意識の延長で本論が注目するのは、和歌と漢詩が相互に補完し合うことで新たな表現世界を構築するようなあり方であり、ジャンルを総合させるスタイルの創出が試みられている点である。

以下では、〈和漢〉の概念に対する視座の転回や、とらえ直しの際に提案されている新たな枠組を押さえた上で、『新撰万葉集』という具体的なテキストを通して、九世紀後半(『古今和歌集』成立以前)の日本における詩歌の書記スタイルをめぐる営みを考察していく。

2. 外来文化の吸収・受肉化のとらえ直し——プロセスの重要性へ

本論の趣意を明確にするために、東アジアをめぐる近年の研究動向に触れることから始めよう。近年の傾向として、かつて「影響」という一方通行的な観点でとらえられてきた日本と中国の文化的関係が、東アジア(漢字文化圏)における相互的またはネットワーク的な視座からとらえ直されていることを指摘できる。中でも「唐物」というモノに焦点を当てた研究が、かつて流通していたイメージを着々と塗り替えており、例えば「天平文化の国際性」や「国風文化」という概念のとらえ直しは本論と無関係ではない。

2) 久曾神昇「新撰万葉集原撰本の出現」『愛知大学文学論叢』第三輯、1950年11月。同「原撰本新撰万葉集の本文批評」『愛知大学文学論叢』第三七輯、1969年3月。高野平『新撰万葉集に関する基礎的研究』風間書房、1970年など。

3) 浅見徹・木下正俊共編『新撰万葉集 校本篇』私家版、1981年。『新撰万葉集 索引篇 I 和歌索引』私家版、1983年。『新撰万葉集 索引篇 II 序・漢詩索引』私家版、1989年。新撰万葉集研究会編『新撰万葉集注釈』巻上(一)・(二)、和泉書院、2005-06年。半澤幹一・津田潔『対訳新撰万葉集』勉誠出版、2015年。

4) 拙論「〈余計なもの〉とどう向き合うか——『新撰万葉集』から東アジアの方へ——」『中古文学』百二号、2018年11月。

5) 拙論「『翻訳』『翻案』の創造力へ——『新撰万葉集』から『翻訳の多様性』を考える——」『物語研究』第十九号、2019年3月。

日本の奈良時代(710~794)に花開いた文化を「天平文化」と呼ぶが、その特徴は遣唐使によってもたらされた唐の文物に象徴される国際色の豊かさであり、その精髓を伝える正倉院宝物は、西域に由来する文物や要素が強調されてきた。結果として、「シルクロードの東の果てである日本には、必然的に舶載品が集積されていき、正倉院の大半はそれら舶載品から構成されている」というイメージが形成され流通してきた。しかし、それは説明不足のイメージであり、修正が必要となっている。

例えば、文化財学に取り組む成瀬正和氏は、正倉院宝物総点数九千点のうち唐をはじめ海外から舶載された可能性が高いものは5%にも満たないことを指摘している⁶⁾。つまり、正倉院宝物の大半は日本で製作されたものであり、よって「正倉院宝物=舶載品」という一般的なイメージは成立しないことになる。すると、天平文化の「国際色の豊かさ」に見るべき事柄は、単に舶載品が正倉院に残されていることではなく、そこに「外来文化を吸収・受肉化する営為」⁷⁾が認められる点に見出されなければならないだろう。舶載品から学んだことが、どう新たな文化的創造に繋がるのかに目を向けることが重要になる。

また、そうした外来文化との関わりを論じる際に、日本文化を表わす中心概念となるのが「国風文化」というタームである。この語の教科書的な解説は、〈八世紀の国際色豊かな天平文化から、九世紀の唐風文化である弘仁・天長文化を経て、それまで受容した大陸文化の消化が進み、貴族社会を中心として日本的な優雅で洗練された文化が生じた。それは、894年に菅原道真の建議で遣唐使が派遣されなくなったことによって、唐の文化の流入がなくなったために日本独自の文化が発達したのだ〉というものである。だが、こうした見解も見直しが必要で、特に遣唐使の停止と「国

風文化」の成立を短絡的に結びつけることは控えなければならない⁸⁾。

確かに道真の建議によって長年続いた遣唐使は停止された。しかし、それは歴史研究者の網野善彦氏が述べるよう、航海上の危険や財政上の困難といった理由だけでなく、すでに中国大陸や朝鮮半島から頻りに商船が来港しており、そうした商人たちとの交易によって朝廷の必要とする品物や情報が入手可能であったこと、また、唐、新羅、渤海の諸国がしだいに衰えつつあるという東アジアの現実を認識した上で行われた建議であった⁹⁾。文学研究者の河添房江氏は、貴族社会における「唐物」のあり方から、より具体的に「国風文化」の構成における「漢」の重要性を説いている。八世紀の新羅商人や渤海商人、やや遅れて九世紀の唐商人の活躍により、大陸からの唐物の流入は遣唐使時代よりも圧倒的に増加していることを明らかにし、「国風文化とよばれる時代の内実をささえていたのが、東アジア交易圏であり、国風文化とは、鎖国のような文化環境で花開いたものではなく、唐の文物なしでは成り立たなかった文化」であることを指摘する¹⁰⁾。「国風文化」(=和)を構成する要素を成り立たしめる文化的土台に、「唐物」(=漢)は不可欠であった。遣唐使の停止によって「唐の文化の流入がなくなった」ことが「国風文化」を導き出した、というような単純なものではないのである。

そもそも「国風」という概念は、遡れば『詩経』の篇目の「国風」がはじまりで、それは「国(地方)の風俗」を意味するものであり、各地方の文化的特色一般を表わすものだった¹¹⁾。日本的ないしは和風といった文脈で「国風」(「唐風」の対比概念としての「国風」)が使われるようになるのは

8) 河内春人「国風文化と唐物の世界」『古代史講義——邪馬台国から平安時代まで』ちくま新書、2018年。

9) 網野善彦『日本社会の歴史』(中)、岩波新書、1997年。

10) 河添房江『唐物の文化史——舶来品からみた日本』岩波新書、2014年。同『光源氏が愛した王朝ブランド品』角川選書、2008年など。

11) 村井康彦『文芸の創世と展開』思文閣出版、1991年。

6) 成瀬正和「正倉院宝物を考える」『正倉院宝物に学ぶ』二、思文閣出版、2012年。

7) 飯田剛彦「遣唐使と天平文化」『古代史講義——邪馬台国から平安時代まで』ちくま新書、2018年。

近代以降であり、例えば吉沢義則氏、小島憲之氏が九世紀前半の唐風文化の隆盛について「国風暗黒時代」という呼び方をしたのは、よく知られるところである。弘仁文化を唐文化の受容と模倣の段階ととらえ、日本におけるその文化的発現を「唐風」と称し、さらにそれが変容した日本的なるものを「国風」と読んだわけだが、その概念・実像が上述のように近年とらえ直され始めていることを、まずは強調しておきたい。

3. 〈和漢〉の基本構造

「国風文化」の実態を把握する足掛かりとして、日本美術史家の島尾新氏が提示する「和漢の基本構造」¹²⁾は示唆に富むものである。この図の特徴は、中国(漢)と日本(和)を単純に対比させるものではなく、日本文化を構成する要素を日本的なるもの(和の中の和)と、中国的なるもの(和の中の漢)に分けて対置させて理解する点である。

図を理解するための補助として、島尾氏の『和漢朗詠集』¹³⁾上巻・春の部に載る「躑躅を詠む」の詩歌に対する解説を辿っておこう¹⁴⁾。

晚蕊尚開く紅躑躅 秋房初めて結ぶ白芙蓉 白

夜遊の人は尋ね来つて把らんと欲す 寒食の家は折り得て驚く

べし 順

思ひいづるときはの山の岩躑躅いはねばこそあれ恋しきものを¹⁵⁾

12) 島尾新「日本美術としての唐物」『唐物と東アジア』(アジア遊学147)、勉誠出版、2011年。

13) 『和漢朗詠集』とは、平安時代中期(1013頃成立とされる)の藤原公任撰による歌謡集であり、当時の貴族や女房たちに朗詠されていた漢詩文の詩句や章句をもとに、和歌を合せて分類配列したテキストである。

14) 前掲注1。

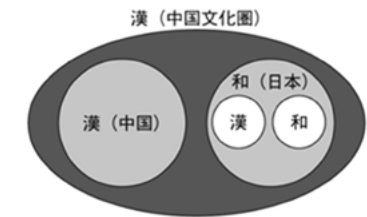
15) 『和漢朗詠集』の本文は『日本古典文学全集』(小学館)に拠る。

最初の詩の後に書かれた「白」は、唐代の詩人白居易(772~846)のことであり、作者の名を略号で示している。引かれるのは「元十八が谿居に題す」の頸聯で、知人の山中の家に咲く躑躅を詠む。これは中国人による漢詩であるため、図に言うところの「漢(中国)」である。一つ飛ばして三つ目は和歌である。躑躅が詠まれているわけではなく、続く「いはねば」を引き出すための「岩躑躅」である。「白」にあたる名前がないのは「よみ人知らず」のためだが、『古今和歌集』にも採られている歌で、『十訓抄』は藤原国経の歌としている。いずれにせよ、日本人の手になるため図の中の「和(日本)の中の和」といえる。

真ん中の詩を作った「順」は、源順(911~983)で、平安時代を代表する知識人の一人である。「石榴、火よりも艶なり」という詩から採った「躑躅の赤を火と間違える」という句である。これは「和」であるのか、それとも「漢」であるのか。日本人が日本で作ったのだから、産地からすれば「和物」だが、『和漢朗詠集』の和漢は「和」=歌、「漢」=詩と決まっている。したがって、これは日本人の作った「漢」、「和製の漢」ということになる。

以上の解説から確認されることは、「和」と「漢」はきれいな分類概念にならないこと、すっきりとした二項対立の構造をしていないことである。「和」のなかには、「和」も「漢」も両方が存在している。こうした「和製の漢」のあり方を、『和漢朗詠集』の成立に一世紀以上先立つ『新撰万葉集』において確認してみたい。『和漢朗詠集』で列記された詩歌は、四季などの主題に添って併記されており、漢詩と和歌の相互関連性が希薄なのに比べて、『新撰万葉集』は和歌を漢詩に翻訳・翻案するという行為が加

和漢の基本構造



わることにより、より複雑な「和」「漢」の動態を確認できるはずである。

4. 『新撰万葉集』の和歌と漢詩について

まずは『新撰万葉集』の辞書的な解説を示しておく。

平安前期の和歌撰集。二巻。序文によれば上巻は八九三年(寛平五)、下巻は九一三年(延喜一三)成立という。原形は宇多朝(八八七～八九七)の「寛平御時后宮歌合」歌を主体としてほかの歌合歌を加えて上下両巻に分ち、おのおの春・夏・秋・冬・恋(思)の五部立に編集した和歌撰集であり、各歌の左に添えられた七言絶句の漢訳詩も当初は数首にすぎなかったものが増補されて現形に至ったと考えられる。『菅家万葉集』と異称されたが、菅原道真自身の関与を裏づける確証はない。和歌の表記は万葉仮名(真名体)が用いられ、仮名遣いに平安初期の古態を残す。和歌と漢詩の表出方法の異動を考える好資料でもある。¹⁶⁾

和歌を真名体で表記すること、和歌と漢詩を併記すること、和歌を七言絶句に翻訳・翻案すること、いずれも和漢をめぐる言語的・文化的・社会的・思想的な種々の問題を喚起するハイブリッド(混成的)なテキストである。

893年という成立時期も重要であり、その時期は『古今和歌集』成立(905年)以前、つまり和歌表記が特定の形式に固定化される前の、文体模索の時期に相当している。和歌表記における「和」が確立する前の混沌期に、「漢」の文化は「和の中の漢」としてどのような役割を演じている

16) 『日本大百科全書』(小学館)の渡辺秀夫氏による解説。

のか。

まずは数首の詩歌を概観して、和歌と漢詩の特徴を確認しておこう。『新撰万葉集』の和歌から漢詩への移し替えの方法は、翻訳的なものから二次創作的なものまで多種多彩である。例えば、『新撰万葉集』冒頭の詩歌は次のようなものだ。

みずのうえにあやおりみだるはるのあめややまのみどりをなべてそむらむ
水之上丹文織素春之雨哉山之緑緒那倍手染濫 (巻上・春・1)

春來天氣有何力 春來りて 天氣何の力がある
細雨濛々水面穀 細雨濛々として 水面穀あり
忽望遅々暖日中 忽ち遅々たる暖日の中に望めば
山河物色染深緑 山河物色 染めて深く緑なり¹⁷⁾

「水面に縦横にあや模様を織りなす春の雨は、同時に山の草木を一面に緑色に染めるようだ」という歌が、「春來りて天氣何の力がある」の七言絶句に置き換えられる。和歌の主要な要素を漢詩四句にある程度均等に配分するこの詩は、和歌の世界とある程度の等価性を保った翻訳的な漢詩として理解している。

翻案的な例も挙げておこう。まず和歌から漢詩への移行に際して趣向を変える例である。

なつやまにこひしきひとやいりにけむこゑふりたててなくほととぎす
夏山丹戀敷人哉入丹兼音振立手鳴郭公鳥 (巻上・夏・36)

一夏山中驚耳根 一夏の山中 耳根を驚かす
郭公高響入禪門 郭公高く響く 禪門に入るに
適逢知己相憐處 適知己に逢ひて相ひ憐れぶ處

17) 『新撰万葉集』の和歌・漢詩の本文は、新撰万葉集研究会編『新撰万葉集注釈』巻上(一)・(二)(和泉書院、2005-06)に拠り、和歌にルビを付し、漢詩には訓読文を付した。

恨有清談無酒罇 恨むらくは清談有りて酒罇無きことを

「夏山に恋しい人が入ってしまったのであろうか。声をふりしぼって鳴くほととぎすよ」という歌が、「一夏の山中耳根を驚かす」「郭公高く響く禅門に入るに」とされる。一・二句目で和歌の内容はほぼ移し替えられ、残りの二句は和歌にはない情報が追加されている。夏の歌として収められており、また歌は「ほととぎす」を擬人化したものだが、その雰囲気は〈恋〉を想像させるのに対し、漢詩は〈夏〉や〈恋〉といった趣向をずらし、「清談」や「酒罇」とあるよう、いかにも漢詩的な男性同士の清談的友情関係に変形させていく。このような趣向のずらしには、後の「本歌取り」に通じる発想や想像力の働かせ方を見ることができよう。和歌を踏まえながら別の趣向の創作にすることは、翻訳ではなく翻案や二次創作となるが、その場合は和歌の世界を漢詩で忠実に再現することよりも、どのように趣向をずらしたのかという側面が翻案者の腕の見せどころになる。

ただし、このように和歌に併記された七言絶句に対しては、往々にして否定的批判的な評価が下されてきた。「夏山に」の例でも明らかなように、和歌の三十一文字(三十一音)を七言絶句で再構成すると、和歌と漢詩の情報量に大きな差が生じることを避けられない。「短歌で表現されている事柄は概ね七言二句で尽くせるので、七絶で対応させようとするれば、あとの二句の余裕をどうするかが問題」となるが、『新撰万葉集』の漢詩は和歌の内容を「適当に引き伸ばしたり、あるいは別の事柄を持ちこんでつじつまを合わせることに終始している」と指摘されることもあった¹⁸⁾。

もちろん付された漢詩を積極的に評価する研究者もいる。例えば、小

島 憲之氏は平安人の「正しい和歌解釈」が漢詩には表われているとし、和歌解釈の補助資料として参照した。しかし、その〈正しさ〉の判定は、論者による恣意的な傾向が強いと云わざるを得ない。例えば、「夏山に」と同じく翻案的な詩歌の例であるが、次のような変換に対する評価の違いに端的に表れてくる。

はるたてどはなもにほはぬやまぎとものかるねにうぐひすやなく

春立砥花裳不勻山里者懶輕聲丹鶯哉鳴 (卷上・春・10)

堯堯幽亭豈識春 堯堯(かうかく)の幽亭 豈春を識らむや

不芟絶域又無勻 不芟の絶域 又勻ひ無し

花貧樹少鶯慵囀 花貧しく樹少なくして 鶯囀るに慵し

本自山人意未申 本自 山人意未だ申べす

歌意は「立春になっても花も咲かない山里では、おもしろくなさそうに鶯が鳴いている」というもの。この和歌が漢詩では「堯堯(かうかく)の幽亭 豈春を識らむや」「不芟の絶域 又勻ひ無し」と変換されていく。「堯堯(かうかく)」は砂、石の交じった痩せた土地、「不芟」は植物が生えないこと、そして「絶域」は唐代の詩文で砂漠地帯を指す言葉であり、和歌から想起される情景とは大きな隔たりが認められる。

この詩歌の関係について「『新撰万葉集』注釈稿」は、「本詩の和歌の「春立てど花も勻わぬ山里」から、元来草木の殆どない砂漠のような場所を連想してしまったために、季節の推移と風物の齟齬をいう和歌と内容的に懸隔が出来たばかりでなく、作品としても完成度の低いものになってしまった」と評している¹⁹⁾。

対して小島氏は、「春の花のおわぬ山里といえ、すでに詩を学んだ

18) 村上哲見「漢詩と和歌、『句題和歌』『漢詩と日本人』講談社、1994年。

19) 半沢幹一・津田潔「『新撰万葉集』注釈稿(上巻春部10~14)」『共立女子大学文学部紀要』41、1995年2月。

平安人にとって遠い砂漠の国を聯想するようになっていたのである。この歌に対する右の詩の解釈は現代人にとっては唐突にみえる。しかしそれは当時の詩人による当時の詠歌意識に即した一つの解釈であり、歌人の「あや」を正しく突いたものといえよう²⁰⁾とし、当時の〈正しい和歌解釈〉が示されている詩として積極的に評価する²¹⁾。

こうした評価の断絶を乗り越えるためには、和歌と漢詩の関係を言語学的な観点から意味・内容の等価性を論じ、その忠実度を評価の基準とする観点とは別の方向性が模索される必要がある。その線で興味深い指摘をするのが渡辺秀夫氏である。渡辺氏は和歌に付された漢詩の意義を、「漢詩であること」と「番えること」に見出し、和歌と漢詩それぞれの《本意》の対照を浮き彫りにし、それを比較・対照して楽しむ遊戯的な試みが『新撰万葉集』で行われていることを指摘している²²⁾。詩歌のそれぞれの内容とは別に、和漢併記という特殊な書記形態に目を向ける新しい方向性を示したものである。

ただし、本論前半で島尾氏の見解を参照してきた立場から述べれば、ここで併記されて対比・対照される「和」と「漢」の《本意》は、中国の「漢」とは異質なものである点に注意せねばならない。単純に、日本人の手になる和歌と中国人の手になる漢詩を、テーマに即して併記したというわけではなく、日本人の手になり、しかも和歌を基に再構成された「和製の漢」が『新撰万葉集』の漢詩だからである。

20) 小島憲之『古今集以前一詩と歌の交流一』塙書房、1986年。

21) 新撰万葉集注釈』は、慶滋保胤の「池亭記」に「夫京外時争住、京内日陵遲。彼坊城南面、荒蕪眇眇、秀麦離離、去膏腴就境塙、是天之令然歟、将人之自狂歟」を引き、「都の中心地から離れた辺鄙な周辺地帯を、平安びとは「境塙」の地と捉えたこと、また「絶域」も、辺境の砂漠地帯をいうのではなく、歌の「山里」と対応し、都の周辺の辺鄙な土地を指すと解すべきとするが、やはり和歌と漢詩のそれぞれから映出される風景の断絶は埋めがたいものがある。

22) 渡辺秀夫「『新撰万葉集』論」『和歌の詩学—平安朝文学と漢文世界—』勉誠出版、2014年。ここで言われる《本意》とは、和語脈のイメージ（歌材・歌語）と漢語脈のイメージ（詩材・詩語）のことである。

5. 本場にはない「漢詩」の役割

「和製の漢」である『新撰万葉集』の漢詩は、中国の漢詩とは異なる役割をテキスト上で演じてはいないだろうか。「和の中の漢」という観点から考えるならば、漢(中国)にはない「漢」のあり方が模索されていい²³⁾。注目されるのは、和歌と漢詩が一体となって虚構世界を創出するような関係で結ばれている詩歌である。以下で見ていくような、和歌と漢詩が相補的な結びつきを見せるスタイルは、和漢のコラボレーション(共同・共作・合作)した新たな表現形態の出現である。

ちるとみてあるべきものをうめのはなうたてにほひのそでにとまれる
散砥見手可有物緒梅之花別様匀之袖丹駐禮留 (卷上・春・10)

春風觸處物皆樂 春風触るる処 物皆楽しむ
上苑梅花開也落 上苑の梅花 開きまた落つ
淑女偷攀堪作簪 淑女偷かに攀ぢて 簪と作すに堪へたり
殘香匀袖拂難卻 殘香袖に匂ひて 払へども却きがたし

歌意は「花は散るものだとみていればそれでいいのに、梅の花は困ったことに香りが袖に残っている」というもので、落花をやむを得ないものとしてあきらめる気持ちを示しつつ、散るとあきらめた梅の花の香りだけが残り、いつまでも梅が忘れられないことを「うたて」と詠むことによって、かえって梅への未練の断ち切りがたさが述べられた歌である。

この歌が「春風触るる処物皆楽しむ」の七言絶句に変換されているわ

中国にはない表現形式として、「和習(和臭)」と呼ばれる詩句の用い方に関する考察がある。『新撰万葉集』では谷口孝介氏が「和習」の淵源を本テキストに見出している(谷口孝介「『和習』の淵源—『新撰万葉集』巻上の漢詩を中心として—」『日本語と日本文学』49、2009年8月)。

けだが、注目されるのは三句目で、歌にはない「淑女」が語り手によって据えられている点である。上苑の梅をこっそりとよじる淑女の袖に梅の香りが移り、「残香袖に匂ひて払えどもものぞきがたし」とされ、和歌に詠まれた「うたて」の不快感が小さな物語風に仕立てられている。上苑の梅をこっそりと盗み折ったことが露見するのを恐れるのか、それとも梅の香りが他の男性の薫香と間違えられ、あらぬ疑いをかけられることを恐れるのだろうか。

この和歌に併記される漢詩は、単純に和歌を翻訳したというものではない。和歌の作られた状況を物語的に説明するような機能を漢詩が果たしている。漢詩は「淑女」の客観的な様子を述べ、和歌は彼女の内面を歌

ったものとして享受することができるような構成だ。一人称の和歌と、三人称の漢詩が相補的に詩歌の世界像を充実させていく。

極端な短詩型である和歌は、往々にしてきわめて曖昧である。主語は明示されず、動詞が形容詞で構成され、読者は和歌に表現される主体が誰であるかを憶測する必要がある。人称や性別や数も多くは曖昧である。誰のことに言及しているのか、また、何について、どのような理由で詠んでいるのかといった重要な要素は、しばしば省略される。そのような和歌の持つ社会的コンテキストの不透明性は、それを散文で表現する詞書や歌物語、歌日記、日記文学などのジャンルを生み出す要因ともなっているが、『新撰万葉集』ではその役割を漢詩が果たしているのである。本論「はじめに」で示した画像で確認できるが、『新撰万葉集』の詩歌には「作者名」が記されないという特徴がある。詠出主体のコンテキストを完全に切断しているため、歌の解釈を具体的な個人に還元して行うこ



とはできない。和歌を取り巻くコンテキストの不透明性を漢詩が補うという構造となっているが、それは詠作主体の現実的な文脈ではなく、まったくの虚構であり、歌物語の生成という同時代的な動向に関わる可能性が想定されるが、その点については機会を改めて考えてみたい。

話を戻すが、次のような詩歌も和歌と漢詩が相補的に結びつく例である。

ひとしれずしたにながるなみだかわせきとどめてむかげやみゆると

人不識下丹流留淚河堰駐店景哉見湯留砥 (卷上・恋・114)

毎宵流涙自然河 宵ごとに流るる涙 自然に河たり
 早旦臨如作鏡何 早旦に臨みて 鏡と作さむこと如何
 撫瑟沈吟無異態 瑟を撫で沈吟して 異なる態無し
 試追蕩客贈詞華 試みに蕩客を追ひて 詞華を贈らむ

和歌は「あの人に知られることなく心の中に涙川が流れる。それを堰き止めるものだ、(水鏡として)あの人姿が見えるように」というもの。歌の内容は一・二句目で移し替えられ、三句目の瑟を弾き静かに歌を歌うことで時間をもてあそぶしかない女性の様子や、四句目の浮気なあの人に恋の歌を贈ってみようという思いは、和歌からは読み取ることのできない情報の追加である。注目したいのが四句目の「試みに蕩客を追ひて詞華を贈らむ」の箇所である。「蕩客」は、気ままに家を離れて帰らない者(ここでは夫か恋人)をいい、「詞華」は美しい詩のことばの意で、ここでは恋の歌を贈ることを言う。すると和歌は、漢詩に据えられた女性が詠んだ「詞華」であったというような、一つの歌物語的世界として和歌の意味が新たに再構成される仕組みがここでも確認される。恋部に収められた本詩歌で指摘しておきたいのは、漢詩というジャンルにかかる表現的な規範を、和歌によって乗り越えようとする志向性も読み取られる点

である。

日本文学の中で主要なテーマである恋愛的要素が、中国の詩文で乏しいことはよく知られている。中国の古典文学は士大夫階層によって担われており、その精神の中心を占める儒家の思想・文学観に支配されているためである。政治的・倫理的な性格が強い儒家の文学観が、非政治的な個人の感情であり、さらに往々にして反倫理的ですらある恋愛という面を抑圧するのは当然のことであった²⁴⁾。恋愛を詠う際に数多く作られたのは、男性詩人が女性の立場(視点)に立って男性への恋情を述べる「閨怨・閨情」の作である。女性の立場に立って三人称的(客体的)に恋情を描くものである限り、恋愛や性愛が描かれていようとも、それは知識人たる男性作家の恋愛への耽溺や惑溺を意味することにはならない。耽溺や惑溺は、詩中のヒロインに属するものとして、社会的な批判をかわすことができる²⁵⁾。

そのような社会的、ジャンルの規範意識は『新撰万葉集』にも働いており、恋(思)部に採録された和歌は、典型的な閨怨詩に置き換えられている。この詩の「夫を思い琴を奏でる女」の描写は、閨怨詩の典型的な情景である。だが、その典型的な情景に、女の気持ちを一人称で歌いあげる和歌が加わることによって、漢詩の景はより人間の内面に踏み込んだ切実なものとして再構成される。

和歌と漢詩、それぞれを別個に取り出して分析するのであれば、和歌は和歌の伝統に、漢詩は漢詩の伝統に則って作られており、表現的な傾向(歌語の典拠・出典や技法の特色など)以上の何かを見出すことは期待できない。また、漢詩を和歌の翻訳であるという見方にこだわると、和歌にはない情報を加える漢詩にはこれまで同様に低い評価が下されて

しまう。見てきたように、『新撰万葉集』の和歌と漢詩の関係は、バラエティに富んでいる。個別の詩歌として鑑賞するのではなく、また「漢(中国)」にはない漢詩のスタイルというのを抜き出そうとするのであれば、和歌と漢詩のコラボレーションによって新しい世界観を構築するようなあり方は、今まで以上に注目されていい。和歌と漢詩を相補的に関連づけるこのスタイルそのものが、「和」のなかの「漢」の特殊なあり方の一つなのだ。

6. おわりに

東アジアという視座から、従来の和漢比較研究は様々な転換が図られている。本論で取り上げた「唐物」が日本に「ある」ことの強調から、「唐物」から「いったい何を生み出したか」への転換や、「国風」が「唐風」からの独立ではないことなどは、その一端でしかない。そうした中で、〈和漢〉という二項対立的なタームでは、文化の複雑で多様な動態を記述するには限界があることが自覚されてきている。「和」と「漢」の境界領域に眼差しを向けること、そしてそれを論じるための用語(たとえば「和製の漢」)のさらなる検討が望まれる。なお、こうした境界領域に目を向ける問題設定は、漢字文化圏のそれぞれの地域でも共有できる視座とならずである。

そうした境界的なテキストの一例として『新撰万葉集』を本論では取り上げた。和歌を移し換えた漢詩(七言絶句)を併記するというスタイルは、内容的にも書記形態的にも和漢の境界に位置している。従来の研究は、和歌と漢詩の意味論的な分析から「和」と「漢」の差異を明確にする研究が中心であった。しかし、本論では和歌と漢詩を併記する書記形態

24) 川合康三『中国の恋のうた 『詩経』から李商隠まで』岩波書店、2011年。

25) 松浦友久『漢詩—美の在りか—』岩波新書、2002年。

にも目を向け、和歌と漢詩のコレボレーションによって詩歌の世界を充実させるような側面があることを強調し、結果として和歌と漢詩を個別に分析したのでは出てこない、新たな表現世界の創出を指摘した。

何度も繰り返すことになるが、『新撰万葉集』は『古今和歌集』成立以前の日本の書記をめぐる興味深い試みが読み取られる重要なテキストである。しかし、歴史的に見れば、このテキストの試みは失敗に終わった。入口敦志氏が「あくまで仮にであるが、『新撰万葉集』が勅撰になっていたとしたら、その後の日本の表記は現在とは大きく違っていただろう。だが、和歌を真名で表記すること、和歌を七言絶句で翻訳・翻案して併記すること、和歌と漢詩を相補的に関わらせることなどが、後の詩歌の表記スタイルの範になることはなかった。主流となるのは『古今和歌集』のスタイルである。

今後は、『新撰万葉集』のスタイルが「規範化されなかった要因」から、当時の文化状況を照射するようなことも考える必要があるだろう。表面的な形式は引き継がれなかったものの、『新撰万葉集』で働いていた想像力・創造力は、同時代的な文化的営みのネットワーク上に位置づけられるものであり、『新撰万葉集』を別の領域に接続して何を見出せるかを今後の課題とした。

[ABSTRACT]

The 'Wakan' Boundary Area, as Seen in the Complementary Relationship of Waka and Chinese Poetry in the Shinsen Manyo-shu.

Atsuo, Nishinoiri(Toho Gakuen Music High school)

This paper examines the boundary area that is created when ancient Japanese culture incorporates Chinese culture. Based on recent research trends in Japan, we examine the problems of terms such as "Wakan"(Wa 'Japanese', Kan 'Sinitic') and "national culture" that have been used in conventional research, and reconsider the text of the Shinsen Manyo-shu, established in the second half of the 9th century. In the Shinsen Manyo-shu, you can see how Waka and Chinese poetry are complementarily related to another, creating a singular fictional world. It is a new creative style that is not confined to an individual genre, and it is a feature that positions itself in a special area called "Kan in Wa" that is neither "Japanese" nor "Sinitic".

Keyword : kanji culture area, wakan, boundary area, poetry from China and Japan, Shinsen Manyo-shu

26) 入口敦志 『『古今和歌集』の意義』『漢字・カタカナ・ひらがな—表記の思想』平凡社、2016年。

[参考文献]

川合康三『中国の恋のうた『詩経』から李商隠まで』岩波書店、2011年。

河添房江『唐物の文化史——舶来品からみた日本』岩波新書、2014年。

小島憲之『古今集以前——詩と歌の交流——』塙書房、1986年。

島尾新『「和漢のさかいをまぎらかす」茶の湯の理念と日本文化』淡交社、2013年。

松浦友久『漢詩——美の在りか——』岩波新書、2002年。

渡辺秀夫『和歌の詩学——平安朝文学と漢文世界——』勉誠出版、2014年。

접수일 : 2019. 07. 25 총평일 : 2019. 08. 12 게재확정일 : 2019. 08. 20.